

「諸藩口書」『兵庫県史』史料編幕末維新一

当藩管轄之内騷擾之次第

遠引^(因)

一 当管下は田地割合より人民多く、農之外余産少く所在貧乏人勝之処ニ御座候、故ニ無抛兼併を押ゆる之政事多シ、之に依り不平之者モ儘有と可申候、其尤大なる者は経界を正すニ在、社倉を設るニあり、其経界を正すハ別ニ新規之事を用ゆるに非ず、只々校高^(徳)を旧に復シ、貧人之田をして非常之税を免れしめ、在来之高を現田ニ割付、而して土地^(村)邨柄ニ応シ、新ニ当引を出シ、民をして農業を励ましむ、其社倉を設るは歎年之手当ニ候得共、無事之日其半を以て少民之牛を買、田地を請戻し、干鰯を買等之融通ニ供シ、利六朱を出さしむ、或は利なきもあり、其米は年々之を返シ、又此を貸を法とす、以て米之新旧をして交代せしむ、之編之法、官より其半を出シ身元之よきに応シ其半を出さしめたる事ニ御座候、右之二法ハ中々容易之事ニは無之、民情之稍上を親しむニより出来上り候事ニ御座候へ共、其時分は藩庁も貧乏之最中なれハ、藩士之内之を疑ふ者御座候て民情之か為ニ動き、一旦ハ其法破レ候村も有之申候、終ニ民情大ニ之を信シ候様成行候処、昨辰年より何か社倉之儀ハにぶく致掛申候、其子細ハか条ニ有之申候、

一 此辺ハ元来仏法之盛なる処ニて何レも貧村之処一村ニ二ヶ寺より少なる村ハ無之位故ニ、生民之蚕害挙て言へからず者あり、故ニ仏を押ゆる之政事多シ、其尤大なる者寺田之徳米ヲ社倉ニ預て在其寺田ハ寺持之田地ニて別ニ寺領之田あるニ非ず、此徳米ハ寺之修治僧徒之公用、則今度御呼出之五ヶ寺江も六拾五兩其内より渡候事ニて、飯米は祭米も有之、又少なきとき或は無抛時ハ其内五斗、壹石を渡すを法とす、只平常之を一身之用ゆるニ供し、事ある時ハ小民を掠むるを防ぐのみ、依之僧徒共自然其勢衰へ、加之、在郷校之設ケニより僧徒之法行れ難く成行掛り候を大ニ怨み、憤満不平称して仏敵と云に至ル、然ルに猶未其犯柄心得打過候処、昨辰年本地仏取除之儀ニ付僧徒共一段力を得、之より神仏滅却杯ト唱へ、其上右社倉ニ儲く小民之手当並郷校之用ニも供し候宮田・講田等之徳米迄常税之外聚斂^(徴カ)無備様姦凶之者を語らい、百法誹謗致シ、加るニ一二小人之民間ニ往来之可助ト相成しより無智之小民段々疑惑を抱き候様相連ひ、随て四方之評説も旧に變し、大ニ惡敷趣も既ニ承知之事ニ御座候、然ルニ右社倉ニ取計ハ中々田舎ニ於てハ大なる扱ニて、其勘定帳面等庄屋役人江可渡し有之候得共、隅々之者迄一二承知為致候事ニハ参り難、余之か為旁昨辰年よりにぶく致し掛申候、此遠因之最大なる者ニ御座候、尤右

社倉ハ権兵衛・八兵衛之者と云如く銘々之者ニ致し遣さぬ計ニて、畢竟下之仲間米ニ候得は、掛り之者其世話を致候耳、然を銘々之者ニ無之ハ矢張上之者之様心得候者、音度取次第ニて疑惑致ニも尤之事ニ御座候、且亦宮田・講田之徳米ハ村民共寄合、只飲食ニ遣捨惡習も有之、且亦庄屋共も之か為毎々疑惑を得候事も有之、旁社倉之儲候事ニ御座候、

近因

一 今度知事君之家禄定るニより無知之小民ハ其訳も不存、此迄三百年來御上々々と思ひ來候処、御上之ものに無之は我々ももつと貫ひ度之意我不知意内ニ含むニよる、既ニ其説も少々承り申候、

一 当八月初三四ヶ処も当年太政官五歩引と云書附を落したももの有之よし、内香下村々・志手奈村々より掛り之者江指出候よし、此頃承り申候、

一 下郷^{三万石を六郷に割し一郷之名}と申高六千石計之処、経界ニより新ニ

千石余定引を出し候、一郷之内右之社倉勘定ニ疑惑を起シ、今度高千石程社倉米拝借を掛り之者江申出、掛之者驚き、色々村役人談合ニて身元よき者江融通米申談候処、十一月十一日退蔵宅江小寺泰次郎病人之見舞として参り

候を幸と致しけん、右之訳柄を以て小前借用ニ参り候者有之候間、此ハ畢竟右之訳柄を告るならんと存、早速泰次郎を以掛り大原辰五郎江何様ニも致し方可有之よし遣候処、折節辰五郎忌中ニ候得共其儀は早速指止、十四日

出勤ニて彼是其取計致居候内、十五日夜より十六日暁暴発ニ及申候、一応之願も指出不申候者此等之儀を被察候、且亦下郷之内五六人掛之者段々世話致候ても懶惰にてと

てもいたし方無之もの有之、無抛貧院様之工共を致候事も有之よし、然るに下郷之内田中村に壹兩人極致し方なき人物有之、博徒共を語らい、二三村を脅かし候内、^{此郷之内三輪村米迄寺ニ於て騷擾之前十一月十三日、より僧徒共会合致候由廻之者より後ニ取調申出候、}

一 西郷之内貴志村之社倉此もこたく申候処、小寺泰二郎^(次)故ありてひとく叱り候よし、此叱り候も泰二郎之氣ニは上之物ニは無之、下之物ニて跡は亦直ニ貸事なれば遠慮なく返米申聞候処、前文之如く修惑一段相増候処ゆへ右

之田中村江打合七暴発之よし、

一 当年之凶作之を第一之起とす、掛り之者ハ騷擾之起る筈なき様存候得共、其存セぬ処則起る処に可有之候、尤掛り之者は孰れも此迄我家を捨たる如く必死骨折候ハ感涙を流す程之事なれば、大抵世話も致候心得ニも可有之、

此処大事之処ニて藩庁より猶亦増引も可致之処、藩庁も御趣意之変革ニて彼是大胆配之時節ニ行逢ひ、掛る騷擾

ニ相成何も恐入候、左すれば藩庁之不行届と云ハ中々左

ニは無之、此退蔵^(百)ニ何も角も被任、亦任し居候事なれば、藩庁之不行届ハ則退蔵之放心ニて、退蔵老人之不行届ニ

御座候、殊ニ今度勿体なきと申も恐入候大参事之
宣下を蒙りし上ハ、上ハ奉汚

朝廷、次ハ賢明無二之知事君、於テ万々有之間布騷擾之
汚名を為負、剩へ御銘々御出役被召候段、殆と身を容る
ニ地なく、退職を乞事再三なれ共、知事君泣て不被免、
然ルニ門を出る二意なく、退て籠居罷在候、

右は先頃御尊申上候藩庁見込之大略ニ御座候得共、とふ
も口と筆とハ大ニ違ひ申候、何卒此段御推察被下度奉願
候、恐惶謹言

(明治二年)
巳十二月十五日

白洲大参事

前島大巡察

右は昨冬無屹度前島大巡察まで差出候書付ニ御座候、
其後追々吟味之処、右之遠因ニ基き候儀ハ勿論ニ御座候
得共、下郷等社倉之疑惑則干鬪代金
穀之勘定等と昨巳年凶作とニより
指起候事も相見申候、但シ下郷より掛り之者まで申出候
高千石之米ハ既ニ借渡させ、殊米ハ社倉ニ曾て無之、亦
田中村宗左衛門が市右衛門江申含め、社倉を潰シ、貧乏
人二分与せんと唱へし次第、又鎮静後須磨田村ニて社倉
郷校を潰せし始末ニて相見申候、

一 私儀ハ妹大病ニ付随意出勤之免許受、長々引籠看病仕居
候処、十一月十五日夜、何か騒ケ敷様子承り候儘、直様
登庁仕、無程知事と共に上郷之内加茂村と申処まで鎮静
ニ出掛ケ申候、尤知事ハ馬上ニ乗、供老騎、私ハ看病之
疲れも少々有之、旁藩庁之古ひし垂駕ニて外ニ供不召連
罷出候処、知事早百姓共屯集せし処ニ至りしに、私之
駕ハ三町計も後し候ゆへ、其処より駕を打捨、知事之馬
前ニ先立知事と共に説諭いたし候処、一旦ハ百姓共静ニ
相成居候処江、後より郷長之者知事並私ともを笠ニきた
りし有様ニて大声ニ何か百姓共を叱き候と斉しく百姓共
一時ニ起揚り号き立申候、折しも処々ニて酒食を貧り来
りし上此所之酒屋ニて亦候酒食を貪り、酔之上りし最中
なれば、色々説諭致候へ共、耳ニも不入号き立、押行申
候但し此時何を願とも未タ取極りし趣意もこれなく、亦
夜中之事なれば、知事たるも不知様子ニ相見へ申候、其より知事
と共に民家ニ入、其処小人数呼寄説諭致さんとせしニ、
前文之如く押行申候、暫其処ニ休息、追々為鎮撫出居候
地方掛之もの此処迄行参候間、知事も共に引取申候、但
私之乘し駕ハ人足之者捨て逃去、跡ニてへし潰れし駕を
持帰申候、知事之馬傷附候杯色々浮説も致し候よしなれ
共、決てそんな事ハ無御座候、

一 十六日曉城下続き三輪村郷校之門を毀チ、社倉米を乱暴
少々、其外市在数ヶ処乱暴ニ及ヒ、追々城下ニ集り候間、
掛り之者指出之。願之趣意承り候処、願書等曾て無之ニ付、掛り之者
願之趣意承り候処、願書等曾て無之ニ付、掛り之者庄屋とも申談彼方此方ニて銘々申立候
処を取集書出せし条々

一元高之事

(豊民)
此は有馬玄蕃所領之節高を増し候由ニて、于今有馬郡
中增高卜唱へ無地高有之申候、然ニ不容易事ニ付聞届
不申候、

一 四分取引之事

此は当巳年免状之四分上納と申事ニ御座候、終ニ五歩
則半引聞届申候、後此五分を引高として貧富等ニより
取捨致させし村も多分有之申候、南郷杯其外富人之者
貧人ニ与へし者も儘有之申候、

一 葬式此迄通之事

此は七八ヶ年前火葬を禁し三日驗之法を行ないしニ、
勝手ニ葬式致し度と申事ニ御座候、元來此は風俗を厚
くセンと折角色々説諭之上行ないし事なるニ、とふも
分らぬ事なれハ、致方もなく、亦世間不通之事ニも候
へは、無拠先刻限之事耳聞届置申候、

一 国枘之事

此は元來壹俵宛壹升枘ニて計り収納致し候事ニて、大
勢か彼方此方ニ計候事ゆへ、大層之洩レ米有之、氣之
毒之事ニ付七八ヶ年新ニ二畳大之筵を製し、其上ニて
十俵積之内より二俵を計り、其余り目方耳を相改為相
濟、聊も洩米無之様变革致シ候事ニ御座候、昔ハ収物
之節込米とて米主より不足なき様余計之米を納来りし
ニ、何之世か此を一俵斗五ニ壹升五合と定め候を、元之
如く壹俵宛之銘々計にして、右之込米も止と申事ニ御
座候、固より余計之物を官より出せと命すへき義ニは
あらねは、其通聞届申候、

一 米拝借十年賦之事

此も聞届申候、

一 榎拝借五ヶ年賦之事

則社會
米

此ハ官江願出候筋ニハ無之、又五ヶ年賦聞届候ハ、社
倉之法も立兼候へは、聞届候筋無之、其か疑惑之処ニ
て、一時説諭も難届候間、先聞届置申候、後疑惑氷解
ニ及ヒ、六郷とも例年之旧法ニ復シ申候、

右之如く相成候ニ付、亦後追々鎮静ニ及ヒ申候、

一 然ル処何者とも知す自ら京人と云、長き脇差を帯し
先寺士と覺敷様子ニミへし、異形之風体
致シ、今何郷より何郷之社倉・郷校を潰シ、追付此村江
も参るへし杯申触しせし者有之、上郷之須磨田邨之者夫
ニてハ村方之難儀と思ひ、誤て其処之社倉一ヶ所郷校一
ヶ処取潰申候、

一 御変革ニ付職製(制)ニも申上候通、

民政之儀ハ一郷ニ民代壹
兩人為指出、郷代と共に諸事を取計わんと之藩議ニて
追々施行わんとせしニ、騷擾ニ及ヒ候間、愈其通可然
とて、即同月十九日六郷江一郷ニ兩人宛民之惣代を銘々
入札ニて可指出よし、以書付申達候処、大小参事を始、
役人之入札セよと心得候ニや、田中村宗左衛門此時宗左衛
門村人共彼
是呼集、右之書付を戴き、此こそ真の殿様の直達に
て、御役人を入札セよとの難有御沙汰杯読候由、願書草稿を作り、
田村市右衛門江晰し、上向ハ我するから、下向、其より市右衛門
ハ各者が能セよと云由等何月何日上之原江一村ニ兩人ツ、集会すへし、若集会
セざるニ於テハ其家を潰すへく申触シ、同月廿七日上之
原江下郷・西郷不殘一村二両、
人ツ々、其余彼郷ニて四五ヶ村計

集会、頭取之者より押印申聞候得共、或ハ印ハなし抔とて押印不致、彼是いたし候内夜ニ入候処より、藩命を以て出張セシ九鬼兵庫・星崎佐右衛門之兩人鎮靜を主ト致候より、押印ハなくて宜布亦願書ハ跡ニて残りし者認候て宜敷候間、四五人之外ハ退散セよと申聞候ニ付、四五人之者より其通り老統江申聞候処、脅徒之者ハ得手ニ帆之勢ニて尽く退散ニ及ヒ、残四五人之者より無印之願書郷中一統と相認指出セシ条々

一 九鬼兵庫大参事之事

一 野津甚三郎小参事之事

一 星崎佐左衛門小参事之事

一 酒井董蔵小参事之事

一 白洲退蔵大参事退役之事

一 小寺泰次郎隐居之事

一 藤田清七退役之事

一 牛馬之命取る事

此者藩士之如き者申談、牛ヲ買候て食料ニ致セシ事有之由、騷擾前之事ニ御座候、

一 宮山持山此迄通之事

一 宮山之儀は癸丑以來之形勢ニ候処、旧來之疲弊非常之備とて更ニ無之、知事深ク之ヲ憂ひ、色々評議之上、上郷之内八幡社之山に良木有之候間、之ニても切払、非常之用ニ供セんと則七八年前、執政九鬼主水知事之代と為て礼服着用、其趣ヲ神ニ告、大分切払申候、其外処々蔭切等仕聊不虞ニ儲申候、然ル処維新之際ニ当り勿体なくも大阪江 御遷幸被為在候ニ付、乍聊米千石貢獻仕候、其後奥羽御征討之節、小藩何之御用ニも不相立候ニ付、保字判金千枚貢獻仕候、右之如ク兩度トも貢獻御聞届被成下候間、此ニテ神慮ニも叶ひ可申と万々難有奉存候、右之次第ニ候得ハ、少も冗費ニ相用候義ニは無之候得共、村民共ハ此等ヲも不弁、且疑惑之筋より申出候事ニ御座候、

一 持林之儀は、古來より三尺回り以上之木は私ニ切取事不相成、切払致シ候時ハ残木として山掛之者改め候上切払候事ニ御座候、然に旧幕之時大阪川方並ニ尼崎土砂とシテ年々回村有之、一樹一木も其局江願出候振合ニ相成、村民共大ニ迷惑致し參、且又山之儀は土砂方之掛ニて藩ニ掛りハなき者之如ク相成来候ヲ、御一新ニ付御廃止相成、土砂之義は藩ニて心得候様御達有之難有事ニ御座候、右ニ付村民共彼是心得違も有之ニ付申出候事ニ御座候、

一 宮田講田是迄通之事

此儀は前ニ申上候、

右之外新田半才年貢杯申出哉ニも奉存候得共、只今其書附所持致し不申候間、少しハ喰違も可有御座候得共、大同小異格別之事ハ無之儀ニ御座候、此段御断申上候、一 右ニ付集会之者共不殘其外之郷迄も知事之屋敷内ニ呼寄

セ、知事自ら説諭致し願之筋ハ聞届不申候得共何れも悔悟仕、引統郷中より詫書指出シ、此迄之御政事通願出申候、然ルニ勘定等之疑惑も有之候間、掛りより場所替申達諸勘定為持出申候、其後南郷少民共元之掛ニ被仰付度段、遂ニ不殘一程願申出ニ至、此疑惑全ク氷解致し候事ニ御座候、

一 知事多年膳ヲ減シ衣ヲ省キ、辛苦經營、尤民江意ヲ用ヒ。候段、泣血も右余程之次第、一藩之者も知事之意ヲ体シ、徒らニ民ヲ役せん事ヲ慮り、諸処之警衛ニも銘々大砲杯運輸致し候仕合ニ候処、今度諸種之疑惑ニ依り、一時騷擾ニ相成、呉くも残念之事ニ奉存候得共、何分私共之不行届何とも奉恐入候、此段申上候、以上

(明治三年)
庚午六月廿九日

三田藩
白洲大参事 印

彈正台
御役所

○読点は出典のまま。